

【検討項目⑧】 検討項目⑦を補完した「単元構想のイメージ 2」

校長の窓 Vol.7を読まれた先生から、「高次の資質・能力」の新設に伴い、単元構想がどのように変わっていくのか、もう少し具体的なイメージをもちたいという声が届きました。

今回は「高次の資質・能力」そのものについて紹介しましたが、今回は、それが各教科の構成や単元づくりと、どのようにつながっていくのかを、もう少し具体的に見ていきたいと思います。

「取りまとめ案」では、知的障害のある子どものための各教科について「生活科」と「職業科」を例に「高次の資質・能力」の設定の趣旨や、それを踏まえた授業改善の方向性が示されています。

ここでは、小学部「生活科」を例に、説明を加えてみます。

小学部の「生活科」は、まだ検討段階ではありますが、

- ・ 学校・家庭での基本的な生活習慣
- ・ 社会での人とのかかわり
- ・ 社会や地域での暮らし
- ・ 身近な自然やもののほたらき

という四つの領域で構成され、それぞれの領域に目指す「高次の資質・能力」が示される方向となっています(図1)。図1を見て、特に印象に残ったのは「何を教えるか」から考えるだけではなく、「どのような生活を送る子どもを育てたいのか」という姿から、学習を考える構造になっている点です。例えば、「学校・家庭での基本的な生活習慣」の領域では、目指す姿として「健康で自立した生活を送ることができる」ことが示されています。つまり、清潔、身なり、身の回りの整理などを教えることそのものが最終的な目的ではないということです。清潔、身なり、身の回りの整理などの学習を通して、子どもがよりよい生活について考え、必要なことを身に付け、健康で自立した生活を送ることにつなげていく。

図1の「高次の資質・能力」の①・②・③には、こうした授業改善の方向性が表れていると考えられます。

まず、①です。ここでは、具体的な活動や体験を通して学ぶことの大切さが示されています。

知的障害のある子どもたちは、実際にやってみること、繰り返し経験すること、そして、学んだことを生活の中で使ってみることを通して、知識や技能を確かなものにしていきます。だからこそ、教師が説明して分からせるだけではなく、子ども自身が実際に行動し、経験できる場面をどうつくるかが重要になります。

また、ある場面ではできていたことが、場面や状況が変わると難しくなることもあります。

そのため、一度できたことを「できた」で終わらせるのではなく、学校生活の中で繰り返し活用させながら、学びを継続的・長期的に積み重ね、らせん状に学びが深まっていく展望を描いた単元づくりや授業改善が大切だと示されています。

次に、②です。ここでは、学習内容を関連付けて捉える視点が示されています。

例えば、「清潔」「身なり」「身の回りの整理」は、それぞれ異なる学習内容です。しかし、実際の生活場面では、それらは別々に存在しているわけではありません。朝の支度を考えてみても、顔を洗う、歯を磨く、服を整える、持ち物を準備するなど、複数の学習内容がつながり、一連の生活として成り立っています。

そこで、「取りまとめ案」では、「清潔」「身なり」「身の回りの整理」のそれぞれの事項を一つずつ習得することだけを目的とするのではなく、学習内容を関連付けながら、生活の中で生きて働く力につなげていくことが重視されています。

つまり、個々の事項を「点」で教えるのではなく、それらを「線」や「まとまり」として捉え、生活に生きる力を身に付けることができる単元づくりや授業改善が大切だと示されています。

そして、③です。ここが、今回の「高次の資質・能力」を考える上で、特に重要なところだと思います。

生活科の目標は、「自立した豊かな生活を送ること」です。図1では、その目標につながるものとして、それぞれの領域における「豊かな生活」の具体的な姿が示されています。例えば、「学校・家庭での基本的な生活習慣」であれば「健康で自立した生活」、「社会での人とのかかわり」であれば「人や社会とのつながりをもった生活」というように、それぞれの領域で学んだことが、最終的にどのような生活の豊かさにつながっていくのかが示されています。ここには、単に「何ができるようになったか」だけではなく、学んだことを生かして、子どもがどのような生活を送ることができるようになるのかという視点があります。

だからこそ、③は、各領域の学習を積み重ねた先にある、「自立した豊かな生活」につながる単元づくりや授業改善が大切だと示されています。

ここまで図1を見てくると、「高次の資質・能力」は、何か新しいものを一つ追加して教えるという話ではないことが分かります。むしろ、「何を教えるか」だけではなく、「それを学ぶことで、子どもがどのような生活を送れるようになるのか」という視点から、これまでの学習内容や授業を捉え直していくものだと考えられます。シンプルに言えば、「どんな子どもの姿を育てたいのか」を描き、その子どもの姿を実現するために、どのような学習内容が必要なのかを考え、内容同士を関連付け、実際の生活や体験と結び付けながら単元を構想していく。このような発想が、知的障害教育における「主体的・対話的で深い学びの実装」をめざしていく次期改訂の一つの柱につながっていると考えます。

そして、ここからもう一歩進めて考えたいのが、「では、実際の単元はどのように構想していけばよいのか」ということです。そのイメージを、次の図2で見てみたいと思います。

高次の資質・能力の設定の趣旨や授業改善に向けたねらい【独自】 知的障害 小学部 生活科

領域	学校・家庭での基本的な生活習慣(仮)	社会での人とのかかわり(仮)	社会や地域でのくらし(仮)	身近な自然やものはたらき(仮)
高次の資質・能力	よりよい毎日の生活を送る上で必要となることを、 <u>①考えて行動する中で、②衛生的で安全な規則正しい生活習慣を確立する力を身に付けることにより、③健康で自立した生活を送ることができる。</u>	身近な人や社会と関わる上で必要となることを、 <u>①考えて行動する中で、②社会で他者と円滑に関わる力を身に付けることにより、③人や社会とのつながりをもった生活を送ることができる。</u>	社会や地域で暮らす上で必要となることを、 <u>①考えて行動したり表現したりする中で、②きまりを守って社会資源を適切に利用する力を身に付けることにより、③秩序を保った共同的な生活を送ることができる。</u>	物事を論理的に、 <u>①考えたり、分かったことを表現したりする中で、②関心をもった事象に自ら働きかける力を身に付けることにより、③探究的な学びにつながる生活を送ることができる</u>

① 生活科の学習では、具体的な活動や体験を通して、自ら考え、判断し、表現をしていく中で、知識や技能を身に付けられるようにすることが重要である。そのため、児童が、実際の行動を伴って学ぶ場を適切に設定しながら、継続的・長期的かつ、らせん状に学びが深まっていく展望を描いた単元づくりや授業改善を促す。

② 各領域の内容には様々な事項が示されているが、ここでは、それらの事項の学習を通して実生活上での発揮が期待される、領域固有の力を示している。「清潔」「身なり」「身の回りの整理」など、それぞれの事項そのものの習得を一義的な目的とするのではなく、各事項を関連付けながら衛生的な生活習慣を確立し、生活に生きる力を身に付けることができる単元づくりや授業改善を促す。

③ 生活科の目標は、「自立した豊かな生活を送ること」である。ここでは、「健康で自立した生活」のように、それぞれの領域固有の「豊かな生活」の在り方を示しており、各領域の資質・能力を身に付けることで、もつてを促す。「自立した豊かな生活」につながる単元づくりや授業改善を促す。

図1

では次に、図1の考え方を踏まえ、単元構想のイメージについて図2を使い、改めて整理してみたいと思います。

図2は、小学部生活科の第2段階、「遊び」と「役割」を扱う単元の例です。一番大きなポイントは、教師が単元を考え始める「順番」が変わるということです。これまでは、「今回は遊びを扱おう。次は役割を学習しよう」というように、学習内容を起点に単元を構想することも少なくありませんでした。

一方、先ほどの図1で示した「高次の資質・能力」の考え方や、この図2の単元構想イメージでは、「まずこの単元を通して子どもにどのような資質・能力を育てたいのか」から考えるという発想が示されています。この例では、「身近な人や社会と関わる上で必要なことを考えて行動し、人と円滑に関わる力を身に付けること」が、単元全体を貫くゴールとして示されています。そして、そのゴールを踏まえて、「学びに向かう力・人間性等」として、どのような子どもの姿を目指すのかが具体化されています。

つまり、最も大切なポイントは、「何を学習するか」から始めるのではなく、「どのような子どもの姿を育てたいのか」から逆算して、単元全体を構想しているということです。

次に、そのゴールを基に、単元目標や評価規準が設定されています。さらに、その資質・能力が実際に発揮される場面が具体的に想定されています。例えば、「鬼役の友達にタッチされたら役を交代する場面」や「担当になった準備や片付けをする場面」などです。このように、身に付けさせたい資質・能力が実際の活動の中で発揮され、その水準を教師が見取ることができる場面を考え、評価場面が設定されています。また、この段階で、自立活動との関連も整理されています。

つまり、単元の目標、評価、そして必要な手立てまでを、一体的に構想していることが分かります。

そして、こうした目標や評価を踏まえて、最後に具体的な学習活動が計画されています。ここでも、教師はゴールから逆算して活動を考えます。例えば、前の単元で身に付けた遊びのきまりを生かせる場面を設定する。遊びの中で、準備や片付けなどの役割を、自然に経験できるようにする。そして、具体的な活動や体験を繰り返しながら、身に付けた知識や技能を、実際の場面で活用する機会を意図的に設けていきます。

つまり、「どんな活動をするか」を先に決めるのではなく、「どんな資質・能力を育てたいのか」を起点に、活動を組み立てていくということです。

ここで、図2の吹き出し部分から、もう一つ大切なポイントを読み取っておきたいと思います。それは、教師は、一つの単元だけを見て授業を考えるのではないということです。前の単元で何を学んだのか。この単元で何を深めるのか。そして、次の単元へどうつないでいくのか。こうした学びの連続性を見通しながら、単元を構想することが求められています。知的障害のある子どもたちは、一度学習したからといって、それがすぐに生活の中で活用できるようになるとは限りません。さまざまな教科や学校生活の場面で、繰り返し活用することで、知識や技能は、徐々に統合的な理解へ、さらに総合的な発揮へとつながっていきます。だからこそ、この単元構想は、一つの単元で完結するものではありません。前の学びを生かし、今の学びを深め、次の学びへつないでいく。そうした、継続的・長期的に学びを深めていく、いわばせん状の学びが前提とされています。

そして、こうした授業づくりを支える仕組みとして、次期改訂では、「デジタル学習指導要領」の整備も検討されています。目標や見方・考え方、高次の資質・能力、評価の視点、教科間の関連などを確認しながら、単元を構想しやすくすることが想定されています。

ここまで、図1、図2と続けて見てきました。これらの資料が、学校現場に伝えようとしていることは、シンプルに捉えたいと思います。「何を教えるか」の前に、「この単元を通して、子どもにどのような資質・能力を育てたいのか」を考える。そして、そこから目標、評価、手立て、学習活動をつないでいく。さらに、前の単元から今の単元へ、そして次の単元へと、学びをつないでいく。

これが、「高次の資質・能力」が示される意味の一つであり、知的障害教育においても、「主体的・対話的で深い学び」を実現していくための授業づくりの方向性なのだと思います。

なお、「職業」の具体例は、紙面の都合上省略します。ぜひ後ほど、「取りまとめ案」の巻末に掲載されているのでご覧いただければと思います。

そして、今日の話と併せて、ぜひ「校長の窓 Vol.7」の内容も、もう一度確認してみてください。

1. 単元名: いっしょにあそぼう

学習指導要領の記述を転記する。

2. 教科の見方・考え方

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようと考えることやそのための方法

3. 領域の高次の資質・能力

学習指導要領の記述を転記する。

統合的な理解 + 総合的な発揮

身近な人や社会と関わる上で必要となることを考えて行動する中で、社会で他者と円滑に関わる力を身に付けることによって、社会的に豊かな生活を送ることができる。

4. 学びに向かう力・人間性等の「見取る姿(仮称)」

学習指導要領の記述や児童の実態を踏まえて設定する。【検討①】

- ・ 身近な人々、社会及び自然に自ら関わろうとしている。
- ・ 互いの思いや気付いたことなどを共有し、他者とともによりよい生活に向けて活動しようとしている。
- ・ 場面や状況に応じて、繰り返し対象に関わり、行動しようとしている。

※ 小学校「生活科」の「見取る姿(仮称)」を基に作成する。

5. 単元の目標と評価規準

単元の目標を基に、評価の観点の趣旨を踏まえて設定する。【検討②】

目標 (評価規準)	知識・技能	思考・判断・表現
	① 友達と協力する遊びや簡単なきまりのある遊びを知っている。	① 身近な遊びの中で、教師や友達と簡単なきまりのある遊びをしたり、遊びを工夫しようとしていたりしている。
	② 簡単な係活動などの役割について知っている。	② 身近な集団活動に参加し、簡単な係活動をしようとしている。

6. 評価場面

身に付けさせたい資質・能力の発揮を見取り、その水準を判断できる課題を考える。【評価課題のデザイン】

- ・ 鬼役の友達にタッチされたら、鬼役を交代する場面
- ・ 担当になったものの準備・片付けをする場面

7. 本単元の指導と自立活動の指導との関連

- ・ 児童Aは、自立活動で、人との適切な関わり方を学んでいるため、使いたい道具を他児が使用している際などに、適切な働きかけができるような手立てを講じる。
- ・ 児童Bは、自立活動で、相手の意図等を視覚的な情報(絵カードなど)から把握することを学んでいるため、視覚的な支援を基に行動できるように手立てを講じる。
- ・ 児童Cには、自立活動の指導との関連からの手立ては、本単元では講じない。

8. 指導と評価の計画

授業内容、評価場面と評価方法を計画する。【検討③】

時間	学習活動	重点	備考
1 3	■ 友達と道具を共有して遊ぶ ● 色水遊び ・ ペットボトル ・ プラスチックカップ ・ ビニール袋 ・ 洗面器	知 思	* 星本の、子供たちが遊具で遊んでいる様子のイラストを示し、子供たちがどのように遊んでいるかということについて確認をしてから実際の遊びに移るようにする。 * 道具を共有する活動を通して、友達に働きかける力を高める。 * 3時間目には、準備・片付けの役割分担を決めて各児童が役割を遂行することで、第2次につなげるようにする。
4 7	■ 遊びのきまりを守って遊ぶ ● 色おに	知 思	* 基本的な鬼ごっこのルールを確認する。 * 鬼ごっこをするための準備や片付けについて、児童一人一人が達成感をもてるように役割分担をする。 * 色の提示方法、触るものの準備やどこに置くかなど、児童の意見をきいて、鬼ごっこを工夫できるようにする。



この単元では、集団において人と円滑に関わることができるようになることを 想定しながら、単元を構想することが重要だ。そうすることで、社会的に豊かな生活を送ることができるための「深い学び」を具現化した単元の一つとすることができる。また、前後の単元での学びの状況を確認して、「継続的・長期的、かつ、らせん状の学びの深まり」の視点から単元構想をすることも大切だね。

図2 教師は単元をどのように構想していくのか
単元構想のイメージ(生活科)

今、重視したい取り組み

ここまで、図1、図2を通して、次期改訂に向け、「高次の資質・能力」を踏まえた単元構想のイメージを見ました。ただし、ここで一つ、大切なことを確認しておきたいと思います。現行の学習指導要領には、「高次の資質・能力」という考え方は示されていません。したがって、今の段階で、次期改訂を見据えて「高次の資質・能力」を設定して単元を構想することを、学校として求める必要はありません。

では、今、私たちは何を大切にすればよいのでしょうか。

まずは、今ある学習指導要領を大切にしながら、一つ一つの単元を点で終わらせず、前の学び、今の学び、次の学びをつないでいく。そのような単元構想を、これからの授業改善の一つの視点として、意識していきたいと思います。

今後、虹の原で大切にしたいこと

虹の原では、令和8年度から、「単元シート」の作成・運用を通したカリキュラム研究を、全校研究として進めています。そのため、令和8年度の「学校経営方針」の重点取組事項の一つとして、研究・研修部に「カリキュラム研究推進担当」を新設しました。各学部の担当者を中心に、指定した教科の「単元シート」を作成・検討しながら、小・中・高の系統性を意識した教育課程づくりに教員一人一人が主体的、対話的に関わることを目指しています。

先日実施した「第2回研究推進委員会」では、単元シートの作成・検討を通して、

- ・ 単元の配列や実施時期
- ・ 単元を構成する内容のまとまり
- ・ 単元間における指導内容のつながり
- ・ 学部を越えた指導内容のつながり
- ・ 学習の深まりを意識した学習計画
- ・ 他教科との関連

などについて、先生方が意見を出し合い、教育課程を見直す取組が進んでいることが、各学部のカリキュラム研究推進担当から報告されました。これは、先ほどお話した、「前の学びを生かし、今の学びを深め、次の学びへつなぐ」という単元構想の考え方と重なるものです。

虹の原では、今ある教育課程を大切にしながら、「つなぐ」視点を一つの軸として、教育課程全体で子どもの学びを支える授業づくりを、これからも進めていきたいと思っています。

参考／引用文献

- 「特別支援教育ワーキンググループ取りまとめ(案) ※会議後修正」 文部科学省(令和8年8月)
-



「やってみよう」、「もう一度やってみよう」、「最後までやってみよう」
この言葉を大切に、魅力ある虹の原の教育を育んでいきます。

— R8年度 学校経営方針の実現に向けて —